

「石原廣一郎日記——終戦から巢鴨獄窓——」(抄)

赤澤 史朗

〔解題〕

ここに紹介するのは、石原廣一郎の一九四五(昭和二〇)年七月二九日—十二月九日の期間の日記である。つまり石原の、敗戦直前の時期から戦犯容疑者として巢鴨拘置所に出頭する前日までの記録である。石原産業東京本社の記念室に原本が所蔵されている石原のこの日記には、ここに紹介した時期に始まり、彼がまだ巢鴨拘置所内にあつた一九四七年六月二〇までの日付が記されているが、やや説明を要するのは、この中に石原の日録が元の形のままで残されているとは限らないという点である。

横書きの大学ノートの罫を縦に使用して書かれたこの日記は、鉛筆書きで書かれているが、そこにはしばしば一度書いたものを消しゴムで消して新たに書き直した跡ばかりか、書いた文章の抹消、一部の切りとり、別の文章を書いた用紙の張り合わせ、さまざまな書きこみなど、後に手を加えた跡が数多く見られるからである。それではこの、後に手を加えた動機はなにかというところ、おそらくそれは「回想録」執筆のための編集作業を、この日記の切り貼りなどを通じておこなつたためではないかというのが、現在考えられる推測であ

る。その書き込みには、「◎独房の二十五日」など、「回想録」の小節の表題となったものも数多く見られ、またたとえば一九四六年三月一二日の途中から四月二九日の途中までのところは、上欄にその間の日付のみ残って、下欄の本文の部分は、一度消された後に、石原と児玉誉士夫、池崎忠孝らとの会話が延々と記されているのだが、この会話が「回想録」の草稿となっていることは間違いない。

どうも巣鴨拘置所内で、石原はものを書く用紙がたいへん不足していたらしい。この日記に限らず、巣鴨で書かれたもので残されているものには、便箋の表裏にまんべんなく書かれていたり、不ぞろいな用紙を綴じ合わせたりしたのも見られ、紙の不足を諸種の工夫によって補おうとした様子がうかがわれる。このように元の日記に加除添削を加えての編集をおこなった理由は、主にこの用紙不足のためから来るのではないかと思われるが、しかしその結果この日記は、しばしば文章のつながりが断ち切られている、たいへんわかりにくい日記となってしまっていると言えよう。またその編集の際に、なんらかの意図から、または単純なケアレス・ミスから、元の記述が損なわれている可能性もないわけではない。しかしその反面、通常の日記より石原自身の発言や考え方を比較的詳しく記している部分も見られ、石原がこの時期、どういう考え方で対処して来たのか、それを知る糸口を与えてくれる面もあると言えよう。

またこの日記の末尾には、栗屋憲太郎氏が『石原廣一郎関係文書』上巻解説中で一部引用している、ホークハースト法務官宛嘆願書の草稿（一九四六年八月一〇日付）や、これまで紹介されていない、一九四六年一月～三月に四回にわたっておこなわれた訊問の内容のメモ、一月一〇日～二月二日の巣鴨での朝、昼、晩の食事メニューの一覧なども記されている。そのほか各所に断片的な書き込みも多く、意味不明のものも折

々見られる。そういった点からすると、ここに抄録した部分は、それでもかなり読み易い部類に属するものであったと言えるだろう。なお活字にするに当って、句読点は適宜これに加え、抹消した部分を起したところは「」で示した。

今回抄録した日記の時期について区分すると、敗戦前後の政治活動や国内での亡命をもくろんだ時期と、九月中旬以降立命館改革に奔走した時期の、二つの時期に分かれると言えよう。そしてこのうち前の時期に關しては、『徳川義親日記』・『東久邇日記』の二つが、石原の日記と一部照合できる資料として存在し、後の時期については『末川博日記』との照合がやはり可能となっている。そこでここでは、石原の記述がこれら他の人々の日記類の記述と、どれだけ付合しているかということを含めて、日記に記された石原の行動の特徴点を簡単に指摘しておきたい。

まず、この日記には記されていないが、七月中のある日、サイパンからの米軍放送が「この戦争の民間責任者」として、久原房之助・池崎忠孝らと並んで自分の名前を挙げていたのを知ったことを、石原は「回想録」の中で記している（『石原廣一郎関係文書』上巻、一九九頁）。となると敗戦、占領軍の進駐となれば、戦犯容疑者として逮捕される可能性があるということとは、この日記がスタートした時点から石原には自覚されていたと言えよう。

そのこともあってか、この時期の石原は一貫して徹底抗戦派の一人として立ち現われてくる。その考えは敗戦直後にも変わらず、八月一九日東久邇首相に会見した折にも、天皇の終戦の詔書を批判し、「本土決戦モセズシテ降伏スルトハ何事デアルカ」と述べているほどである。その徹底抗戦・本土決戦のための石原の策

は、「軍部改革」「軍部ノ作戰用兵改革」（八月四日条）であった。彼はこれを、八月四日には東久邇宮に、八月六日には鈴木首相に、八月八日には木戸内大臣に説いてまわり、八月六日にはこの軍部改革で「天皇自ラ戦線ニ立チテ指揮スル姿ニシテ頂ケバ、民心ハ一変シ総力体制トナル」と鈴木首相に説明している。しかし、石原が説いてまわった側の反応は、いずれもはかばかしいものではなかった。東久邇宮は「既ニ手遅レデナイカ」と言い、鈴木首相は「黙々トシテ語ラズ」、木戸内府はソ連参戦の当日でもあり、石原の提案を頭からはねつけている。

こうした中で石原は、以前からの同志の一人である徳川義親や、大谷憲兵大佐・佐藤戦備課長ら一部軍人と結んで、何事か画策するところがあつたようである。『徳川義親日記』八月一二日条には、「午後、石原氏来り（バーンズ）回答来りし旨の事。錦旗革命のことにつきて話す」とあり、またその前日の八月一日、徳川義親は木戸内府に書簡を出して「錦旗革命」の実行を促し、自分たちにも「用意はあります」と述べている（小田部雄次『徳川義親の十五年戦争』青木書店 一九八八年 一九三頁）。ただし石原の、この「錦旗革命」計画への関与は、ハッキリしない点が多い。というのは同じ八月一二日石原が東久邇宮に会見したことこの記録は、『東久邇日記』（徳間書店 一九六八年）にも載っているが、ここでは石原は、石原日記の記述とは、やや違って、国体護持のためのポツダム宣言受諾を唱える東久邇宮に対し、「石原はしばらく熟考したのち、私の意見に同意し、なお陸軍の中堅層が反対行動を起すようなことがあつたらただちに中止させるよう努力すると誓った」というからである。これでは東久邇宮の説得に応じて、石原はむしろ「錦旗革命」を抑える側にまわつたことになる。

さて、自分が戦犯として占領軍に追及されることを予想した石原は、八月二三日に石原産業の会長職を辞任し、連合国軍最高司令官マッカーサーが厚木飛行場に到着した八月三〇日に国内での「亡命」を決意する。そこから石原は、岐阜・東京・長野と各地を転々とするが、「回想録」によれば長野の斎藤宅からの帰り、松本駅で乗りかえ待ちをした時に買った新聞で、「フト独逸における戦争犯罪国際裁判記事が目についた」という（『石原廣一郎関係文書』上巻、一二三頁）。これ以前は戦争犯罪人は簡単に殺されるのではないかと思っていたのに、連合国軍の戦犯の取り扱いは一応裁判の形式をとり、公判廷で「我々の意見を披瀝する機会」が与えられるのではないかということに気付いたというのである。「回想録」では、これで「亡命」をとりやめる決心をしたと書かれている。しかし石原の日記ではこの点は触れられておらず、その前日の斎藤瀏との話し合いの中で「亡命」をとり止める決意を固めたとなっている（九月十日条）。

さて、「亡命」をとりやめて京都に戻って来た石原は、立命館の総長室に立てこもり立命館改革に全力を挙げている。石原はこの時、立命館の協議員会会長、理事会第一議長であったが、同時に総長代行といった資格で行動しているようである。石原が総長代行であったことは、当時の新聞記事にもその肩書が記されているだけでなく、『末川博日記』一九四五年一月一四日条にもその旨が記されている。そして石原は、自らの目と手で立命館の実態を調査し、さらに教員、学生各層の意見も汲み上げながら、学園改革の基本方針の策定をおこなうのであった。石原が中心になって策定したこの学園改革の基本方針こそが、立命館の戦後の再建の第一歩になったことは間違いない。つまりそれは、立命館の最初の民主化の試みであったのだが、ただしその決定のプロセスは、総長代行としての石原のワンマン的なりーダーシップによっていたという点

も見落せない。石原は学生代表とも会見しその意見を聞いているが（一〇月二四―二五日条）、学生の代表が「学生ノ要求」として改革意見を申し出ると、この種の申し出は「不合理ナレバ之レヲ受ケズ」（一二月二、三、四日条）とハネつけている。石原のちに石原産業会長に復帰した時も、労働組合が「要求書」を提出すると、「要求書」とはなんだと中味も見ずに立腹することがあったというが（石原健三氏談）、この学生に対する対応にもそういった姿勢が現われていよう。また、末川博との学長就任の交渉も、他の理事に相談せず、独自の判断でおこない、末川が立命館の学長就任に応じ、末川の阪大辞職の見通しの立った後の一月一日になっても、「末川新学長ノ事ハ未タ何人ニモ話サズ、私一人ノ心中ニ納ム」と日記に記している。そして十一月五日、法経学部教授会が、「学長変更ニ対シ教授会ノ意見ヲ基ニシテ新学長ヲ決定スベシトノ要求」を提出してきた折には、この要求を言下に否定し、「教授会ニハスル権限ヲ附与スルコトハ断然出来ヌト申渡シ」ている。

さて、ここで問題なのは、その末川新学長招聘の経緯についてである。末川博が石原に会って立命館大学の学長の要請を受け、その就任を承認したのは一〇月中のことである。その間、石原の日記によれば石原は末川と五回会っており、末川の日記によれば石原と三回会っていることになっているのだが、困ったことに両者の食い違いは単に会談の回数だけでなく、十月中にその会ったと記されている日時がことごとく一致しないのである。しかも石原の日記に、後に本人の手が加えられていることは先に述べたが、実は同様の事情は末川の日記にも見られることである。

『末川博日記』は、日記というより手帳の各日付の欄に、その日のことを記したものであるが、これもま

ず先に鉛筆書きしたものを消しゴムで消して、後にペンで書き換えたと推測される記録である。ごく一部に、元の鉛筆書きの部分も残っているが、そのペンによる書き換えがそれぞれいつの時点でまたどのような方針でおこなわれたのかは不明である。従って石原の日記の記述に怪しまれる部分があるのと同様、末川の日記の記述が正確であるとも言いかねるのである。

石原の日記では、最初に娘婿の岩根精一宅で末川に会ったのが一〇月三日のことである。これは石原の思惑では、末川が「立命館学長ニ適任カ否」かを、いわば勝手に値ぶみする目的で会ったものようである。次に、やはり石原の日記によれば末川に会ったのは一〇月一六日のことであり、この時は石原は末川宅を訪問し学長就任を依頼している。そしてその後、二三日、二六日、二九日と連続的に末川に会って説得工作を続け、辞退する末川を口説き落して最後の二九日によく末川から「立命館学長就任ノ承諾」の回答をとりつけたことになっている。

ところがもう一方の末川の日記によれば、最初に岩根宅で石原に会ったのは一〇月一四日のことであり、次の一〇月二一日に石原が末川宅を訪ねて「立命館学長の話」をし、さらに一〇月二八日、「岩根君宅にて石原氏に会ひ、学長を引受けるについて色々条件を話し」たという。

末川の日記によれば石原と会ったのはこの三回であるが、その後三一日には、勤務先の大阪商科大の「学長と立命館の件を話し」している。なおこの三一日の件は、石原の日記の記述とも全く一致しており、石原の日記には「末川博士阪大ニ出向シ、本庄学長ノ承諾ヲ求メラレ」云々と書かれている。また、石原の日記によれば、その前日の三〇日に石原は単独で本庄大阪商科大学長（なぜか石原は一貫して「阪大」と書いてい

る」と会い、基本的に末川辞任の諒解をとりつけているようである。

以上、立命館学長就任をめぐる、石原と末川の会談がいつどんな形でおこなわれたのかは、確定しにくいところがあるのだが、ともあれ末川にとって石原は自分を強力に立命館に招いてくれた人物でもあり、末川の日記からすると、知友も少ない新任の職場の中で、末川が石原をそれなりに頼りにしていたさまがうかがえる。一月に入って末川は、この月のうち実に一三回も石原に会って話をしているのだが、こうしたことからその点は推察されよう。

一二月三日、戦争犯罪容疑者としてGHQから指名されたことを、石原は新聞記者の通報によって知る。この時石原やその周囲の人々は、どうやら戦犯容疑者としての逮捕ということが、直ちにほとんど間違いない死刑を意味するといった考えをもっていたらしい。この点は、子息の石原健三の書いた「父石原廣一郎の思い出」（『石原廣一郎関係文書』上巻）からも推測できる。この日の石原の日記に、立命館の改革も一段落して「中川先生ニ対シテ御恩返シカ出来タ。会社ノ事モ心配カナイ。総テ心ニ残ル処ナシ」とあるのは、明らかに目前に死を迎えた者の感慨と言つて良い。しかし石原にとっては末川学長も誕生して今や「心ニ残ル処ナシ」であっても、就任から僅か一カ月足らずの末川新学長にとって、石原の戦犯容疑での召喚は、まるで二階に上つて梯子をはずされたような気分であったかもしれない。『末川日記』によれば、石原が巢鴨拘置所に入った後の一二月一日と一七日、末川はこの石原の弁護問題で、岩根精一、石原新三郎、大塚弁護士なども会談している。ここでは末川は、今までとは逆に石原の親族や周辺の人たちから相談を受け、アテにされる立場に入れかわっていると見えよう。

もつとも死刑の予測ということとは逆になるが、石原はこの時点では未だ立命館協議員会会長の職を辞任しておらず、戦犯指名発表を知った一二月三日当日に、いわば自分の居ない間の代行として、急遽協議員会の副会長を選ばせている。これは意外に早い時期に容疑が晴れ、釈放される可能性も考慮していたためではなからうか。同じ日の夕刻、末川学長始め大学の首脳部と「小生不在中ノ大学事業上ノ打合」をしているのも、同様の発想からであろう。しかし巢鴨での拘禁は続き、翌一九四六年二月になって石原は立命館の協議員会会長を辞職することになるのである。立命館の石原体制から末川体制への移行は、このような形であわただしくおこなわれたのであった。

〔石原廣一郎日記〕

七月二十九日

午後十時京都発シ、四日市駅二午后三時着イタ。折柄小山工場長、本社二行カントシテ駅ニ在リシニ出合、又山根氏ハ私ト偶然空車シテ居タノデ、三人ハ一端松茂へ着イテ後工場ノ爆撃被害状況ヲ視察シテ、夜松茂ニ宿ス。

七月三十日

午前六時四日市発ノ気車デ東上、途中木曾川鉄橋爆撃デ破壊ノ為メ桑名、長島間○連絡、名古屋二十時ニ着イタガ、東海道線ハ各所ニ渡リ前日来ノ空襲、艦砲射撃ニテ弁天島附近ハ不通、尚本日モ危儼、開通ノ見込立タズ。名古屋駅デ中央線デ行クカ迷フタガ、結局東海道線ヲ選ンタ。途中豊橋カラ二俣線ニ乗り換テ、浜名湖ヲ迂回シテ浜松ニ出タ。途中各所デ空襲ノ被害ノ跡ヲ見ル。沼津駅ニ着タノハ夜十時半、ブラットホームテ夜ヲ明ス。

七月三十一日

午前五時沼津ヲ発車シ、御殿場ヲ経テ東京ハ午前十時着イタ。午后三時、徳本大橋両家ノ結婚式ニヤツトノ事デ間ニ合ッテ、一安心シタ。

八月一日

休養シテ畑ヲ耕作。

八月二日

參謀長會議ニ列席帰朝中ノ和知中将訪問、互ニ戦局ノ前途ヲ憂慮ス。午后、林弥三吉中将及徳川侯ヲ訪問。

八月三日

午后二時、東久邇宮殿下中山公爵ト会フ。中山公カラ「六日近衛ガ輕井沢カラ上京スル、何カ重大事件ノ如シ」聞ク。此ノ日殿下ノ御都合デ、一寸拜謁シテ明日御約束ス。

八月四日

午后五時、東久邇宮殿下ニ拜謁。「事態容易ナラス。特ニ本土決戦ニ備ヘタ中年將兵ハ、戦鬪ノ意識ヲ欠キ地方農村ヲ荒シ、為メニ軍民益々離反セントス。此レデハ戦争ハ勝モ、一日モ早く軍部ノ作戰用兵改革断行セネハ、敗戦必至」。殿下ヨリ「軍部改革ハ同觀タガ、既ニ手遅デナイカ。近衛ガガ来ルノハ重大外交問題デナイカト思フ云々」。石原ヨリ「斯様ナ内外共患条件テ和兵力進ムトセバ、無条件降伏ニ等シキ条件トナルベシ。困タコト云々」。

八月五日

休養シテ畑耕作。

八月六日

午前十時、首相官邸ニ鈴木首相ヲ訪問セシモ、首相急用出来シ為メ、午后二時訪問ス。約四十分間会谈。石原ハ「戦争ハ既ニ最悪ノ状態トナツタコトハ残念デアル。然シ唯一ツノ

手が残ツテ居ル。即チ明治維新直前ノ姿ヲ思ヒ浮ベテ頂キ度。

当時品川沖ニ米ノ黒船（軍艦）が碇ヲ降シ、正ニ江戸ニ大砲ヲ打タントシタ時、政府ハ連日会議ヲスルモ対策ナシ。江戸市民ハ戦々競々トシテ民心落付カズ、江戸ヲ逃出ス（今日ノ疎聞）状態ハ今日ト変リナシ。此ノ時ニ徳川慶喜公ハ、平和裡ニ江戸城開渡ヲナシ、大政奉還、天皇政治確立、民心統一、明治維新成リ、茲ニ英米仏ハ小笠原琉球等ノ占領地ヲ放棄シタ、退散ス。願クハ此ノ難局ニ所スルニ、貴台（鈴木首相）が思切テ軍革ヲ断行シ、全時に首相ヲ辞シ、天皇自ら戦線ニ立チテ指揮スル姿ニシテ頂ケバ、民心ハ一変シ総力体制トナル。斯クナレバ、仮ニ和兵力ストモ有利ナ条件トナルベシ。此ノ場合残サレタ手ハ、鈴木首相ガ徳川慶喜トナラレ、昭和維新断行ヲナス外ナシ云々」。鈴木首相ハ黙々トシテ語ラズ。

午後五時、陸軍省ニ佐藤戦備課長ヲ訪問シ、軍首脳部ノ責任辞職ト軍革断行ヲ力説ス。佐藤氏、同觀ナルモ実行容易ナラスト言フ。

此ノ日、広島ニ原子爆彈落サル。

八月七日

午前十時ヨリ富士見町宅テ、大島陸太郎、芹沢散策、久野中將、相原少將、夏秋氏等ト時局懇談ヲナス。

此ノ日宮中ニテ、木戸、近衛、平沼、首相、東郷外相ノ秘密會議アリ。結果、ソ聯ヲ通シ和兵申込ム。

八月八日

午后一時半、内大臣府ニ木戸候ヲ訪問。石原曰ク「軍部ノ信用ハ一日落チ行ク。之レテ戦争ハ負デアルガ、此ノ節思ヒ切テ軍革斷行シ、軍ノ責任ヲ明ニスレバ、民心一變シテ或ハ好転ニ導キ得ベシ」。木戸候、「既ニ遅ヒ。聯合軍ガボツダム宣言ヲ仕タ、此ノ期会ニ和兵スルヨリ外ナシ」。石原、「斯ル内外情勢ヨリシテ今和兵セバ、日本ハ無条件降伏ニ等シキ最後トナル。其レヨリ先軍革ヲ斷行シ、民心一變シテ後和兵セバ、多少デモ有利ニ和兵ガ出来ル。今ハ和兵ノ時デナ

イ」。木戸、「今和兵セバ国體護持ハ出来ルガ、先ニ延バセバ国亡ブ」。石原「今和兵セバ国體護持ハ出来ヌ。先軍革斷行シテ、民心統一シタ後迄待ツテ頂キ度」。木戸、「最早和兵アルノミ」。遂ニ木戸ヲ解クコトガ出来ナカツタ。

午后四時、和知中將ヲ訪問。

木戸ガ頑強デアツタノハ、既ニ前夜ソ聯ヲ通シ和ヲ申込テ居タノデアツタ。

本日（八月八日）午后十二時、ソ聯ハ対日宣戰ヲ布告ス。

八月九日

午後四時、和知中將訪問。

八月十日

午后四時、大谷憲兵隊長訪問。夜、佐藤戰備課長來訪。色々対策ヲ煉ツタガ既ニ手遅レノ觀アルモ、尚最後迄努力スルコトニシタ。此ノ日、ソ聯宣戰布告ヲ受ケタ為メ和兵ノ見込ヲ失ヒ、改メテスイス國ヲ通シ和兵申込ヲ為スコトニ最高會

議テ決シ、聖斷下ル。

八月十一日

午前八時、和知中将来訪。午后四時、徳川侯訪門。

八月十二日

午前十一時、東久邇宮殿下ヲ御訪ス。殿下ヨリ、前日ノ皇

族會議ノ内容ト和兵条件ノ御話アツタ後、「事此所ニ到レバ、

総テ御聖斷ニ從フ外ナシ。総テ天命デアル」。石原、「万巳ム

得マセンガ、若解答カ日本ノ申出ニ対シ、更ニ条件ヲ附テ来

タ場合ハ、断然一蹴シテ頂キタイ」。ト申上ゲテ引下ル。

午后一時半、海軍省ニ石川少将ヲ訪門。此ノ時既ニスイス

国ヨリノ解答カ着イテ、午后二時、之レニ基キ閣議開カル。

午后三時大谷憲兵大佐、午后五時徳川侯、午后八時相川前

谷十相ヲ訪門、午后九時相川宅へ大谷氏カラノ電話テ、閣議

ノ大勢ハ一蹴ニ決スル模様トノ報告ヲ受ケ、稍安心シテ帰宅。

八月十三日

終日富士見町テ情勢ヲ見ル。

八月十四日

午前八時、佐藤戦備課長来訪、「大勢一蹴ノ如シ、斯クナ

レバ軍革ヲ断行シ、民心一新ヲ最後ノ決意ヲ確ムベシ云々」。

八月十五日

海軍渥見航空隊ニ於テハ納リ着カズ、若イ将校下士ハ飛行

機ヲ東京其他ニ飛シ、戦ハ之レカラダトノヒラヲ散リ。夕方

ニ右翼ノ青年等、愛宕山ニ昇ツテ「イキリ」立ツ。

八月十六日

〔相原久野氏来訪。〕

八月十七日

〔篠塚中将来入。〕〔二行判読不能〕軍首脳部ハ責任ヲ明カニ

スベキタ。杉山元帥カ阿南陸相ト全時ニ自刃サル、ガ武人ノ道ナリト語り、篠塚中將ハ杉山元帥ヲ訪問サル。篠塚中將ハ近代^{近世}希^ミニ見ル武人デアアル。東条ハ私ノ為メニ篠塚中將ヲ預備ニシタ。東条ノ最後、斯クナツタノモ当然ナリ。

鈴木内閣総辭職。

八月十八日

東久邇宮殿下ニ大命降下。

八月十九日

東久邇宮殿下御附武官藤田大佐ヨリ電話ニテ、午前十時赤坂離宮ノ組閣本部ニ來ルベシト通知アリ。午前十時十分ヨリ十時五十分迄、四十分間左記ノ会谈ヲナス。

殿下、「降伏内閣ヲ組織スルトハ考ヘナカツタガ、聖上ノ御氣持ヲ拝察シ遂ニ御受シテ來タ。石原、如何ナル政治ヲ行ツタラ良イカ」。石原、「昨夜一晚考ヘマシタガ、降伏ト言フコト、石原ノ頭ニ予想セナカツタ為メニ、終ニ御答ガ出來ナ

イコトヲ遺憾トス」。殿下、「此ノ上民ヲ苦シメタクナイトノ御聖慮ト、原子爆彈ノ慘状^{惨状}ノ違力ヲ元ニシテ、民心ヲ鎮定ニ導クコトニシテハ如何」。

石原ハ、「先程申上シ如ク此ノ場合打ツベキ手ハ不明デア
ルガ、殿下ノ御考ヘニ対シ參考迄ニ申上スルガ、誠ニ恐レ多
イコトデスガ、十五日ノ玉音ニ付テ御批判ヲ御許シ賜リ度。
国民ヲ此ノ上苦シメ度ナイト仰セ出デハ、限りナキ御高德ノ
然ラシムル所デアアルガ、原子爆彈一発デ死ヌノト、五年十年
ニ渡リ仕事ヲ失ヒ食糧欠乏デ餓死線上ニ立ツ苦難ト、何レカ
御慈悲カ。最後ノ一人迄闘フト言ツテ來タノミ、本土決戦モ
セズシテ降伏スルトハ何事デアアルカ。独逸降伏ノ時ニ、单独
講和シタトテ抗議シタノニ、国民ヲ此レ以上苦シメタクナイ、
国体護持ノ為メニ突然降伏スル。之レハ日本タケノ事ヲ考ヘ、
満州南京比島泰國ヲ見捨ル。之レハ日本人ノ為スコトデナイ。
此ノ事実カラシテ御答ヘカ出來ヌ。勿論十五日ノ事ハ御聖慮
デナイ。重臣ノ責デアアル。殿下、願クハ正義人道ニ立脚シ、
政治ヲ行フテ頂キタイ」トシテ引下ル。

八月二十日

午前七時二十五分デ西下。車中色々考へタガ全ク夢。総テ
事業界ヲ引責スルコトニ決意ス。

大阪本社ニ重役会ヲ開キ、会長引責ヲ発表。

八月二十一日

大阪本社ニ出テ、全職員ニ敗戦後ニ所スル訓示ヲナス。

八月二十七日

大阪本社ニ重役会ヲ開キ、小山専務ヲ社長トス。

八月二十二日

会社残務整理。

八月二十八日

山村、北尾、蒲田市会議上訪問。

八月二十三日

会社残務整理。

八月二十九日

山村、北尾、三好知事ト会見。

八月二十四日

京都宅デ、本社課長以上ト茶会ヲ開ク。

八月三十日

休養。「東条ト一所ニ、戦争責任デ引レルコトハ無念。兎
角亡命ダト決意ス。」

八月二十五日

八月三十一日

京都發午后一時半テ、岐阜県大野黎氏宅ヘ夕方着ク。一泊。

厚木飛行場ニ続々進駐ガ着ク。東京ニハ先着ハ八日ダト言フ噂ガ飛フ。二週間前ニハ空ニ我飛行機ガ飛デ居タガ、今ハ総テ連合軍ノ飛行機ダ。

九月一日

午前八時岐阜發、上京。

感慨無量。進駐軍ガ余ヲ戦争責任者トシテ今日ニモ逮捕ニ来ハシナイト不安ガ時々浮ンデ来ル。然シ何日我家ニ帰テクルカト思フト、住馴タ家ノ恋シサノ為メ、一日二日ト延ヒル

人ノ情。

九月二日

徳川侯訪門。

畑ヲ耕シテ大根、白菜、人参、小松菜ヲ蒔クガ、自分ノ口

九月三日

富士見町、畑耕作。

ニハ入ラヌガ隣組ノ人々ガ利用シテ頂ケバ良イ。又自分ハ思フ存分仕事ヲシテ来タガ、遂ニ失敗、年モ取ツタ。此後ハ畑ヲ耕シテ、静カナ一生ヲ送リタイトモ考ヘラル。

進駐軍先着ノ八日モ来タ。此レ以上居レナイ。今夜十一時デ長野ニ出發。

九月四日

午前八時、東久邇〔宮〕首相宮殿下、御別ニ參殿。

九月九日

九月五、六、七、八日

八日夜十一時新宿發ニ乗ツテ松本ニ着イタ。浅間温泉テ泊ラント行ッテ見タガ、何処モ陸海軍病院トナツテ居ルノデ、

再ビ松本ニ引キ返シ、大町行電車デ午後三時池田ニ着イタ。

小雨ノ中ヲ約一里徒歩、途中町人ニ尋ネ直ク知レタ。池田町ノ南端ノ十二社ノ跡、小川ニ添テ壁モ門モナイサヤカナニ階家デアッタ。

入り口ノ前ニ立ツテ、石原ガ来タ、御主人居ルカト大声テ叫フト、直ク齋藤ノ音テ、珍シイ人ガ来タ、石原ガ来タト奥様ニ語りナガラ、齋藤ハ玄関（入口）ヘ露ル。石原良ク来タ、先上レ、互ニ懐シサト親シミヲ覚ヘツ、二階ニ上ル。齋藤夫婦ハ室ヲ形付ケル騒ギ。先ズ席ガ出来ルヤ、先ズ残念ト無念ヲ語ルト、全時ニ又敗ケルノガ当然デアツタ、今日ノ日本人ノ姿デ勝テバ戦後ハ亡国デアル。総テ神ノ命。御互ノ運命モ何日戦争責任者トシテ呼出サレルカモ知レヌ。今日ハ御別ワカノ兼、一兩日泊ルヨ。

齋藤他家ノ廻リニ四五十坪ノ畑ヲ作り、中々ノ自慢デアル。確カニトマトハ立派ナモノタ。然シ他ハ僕ノ方ガ上ダト、内心自認ス。

夜遅ク迄色々語ッタ。心ノ友ノ親シサ無限。

九月十日

昨日来、友齋藤ト語ル内ニ、何日シカ亡命スルヨリハ正々堂々引カレルコトガ当然タ、亡命セズト決意シ、明日ハ四日市工場ヘ参リ職員ヘ挨拶シテ、京都ヘ帰ツテ静ニ其ノ日ヲ待ツベシト決意ス。

九月十一日

午前七時、十二社ノ芦屋カラ齋藤ニ送ラレ、駅迄一里ノ道ヲ語リナガラ歩ム。犀川ヲ渡ル池田橋上カラ、電工大町工場ガ遥ニ望ム。森轟禊氏ノ遺業ヲ思ヒ浮ブ。

駅デ漸シ齋藤ト別レワカ遺ミナガラ、八時二十五分ノ松本行電車ニ乗ツタ。

松本デ名古屋行ノ三等車ニ乗換ヘ、塩尻駅テハ東京カラノ乗客デ中々混シタガ、敗戦後復員ノ者其他人々ノ話シヲ聞イテ居ルト、時ノ立ツノヲ忘レタ。午后六時、四日市ニ着イタ。突然ノコトデ、松茂ノ爺モ驚イタ。夜松長、齋藤ト会食。

九月十二日

午前八時、工場ニテ従業員ニ告別ヲ述へ、午后一時吉田市
長ニ挨拶。午后四時県庁ニ挨拶。夜京都へ帰ル。

戦争責任者トシテ呼出シヲ受ケル迄ニ、立命館学園ノ改革
ヲナスコトガ石原ノ責務ト考へ、之レニ着手。

九月十三日

大阪本社ニ出——（一） 小山社長、新三郎ト会フ。兩人共驚イ
タカ、僕ノ決意ヲ話シタ。

九月十七日
帰落。（二） 篠原市長来訪。

九月十四日

京都宅デ休養。

九月十八日

山村、北尾、三好知事清水部長訪問。午后立命館。

九月十五日

正午、つるや京都会ニ出席。夕方、知事及清水警察部長訪
問。

九月十九日—三十日迄

大体毎日立命館ニ出テ、学生ノ動向、教授ノ姿、学園財政
内容等、静カニ学園ノ状況ヲ見ル。

九月十六日

立命館理事会、協議員会出席。

十月一日

立命館調査。

十月二日

立命館調査。

十月三日

岩根宅ニテ末川博氏ト会食ヲ共ニシ、意見交換ヲナス。末川氏ト会見ノ目的ハ、立命館学長ニ適任カ否。

十月四、五日

立命館調査

十月六日

中川家ニテ先生一周忌法要。

十月七日

等持院ニテ、立命館主催先生一周忌法要。

十月八日ヨリ十月十五日迄

立命館根本改革方針ヲ左ノ通り石原私案ヲ定ム。

一、教学本位ニ置ク経営

二、教紀ヲ肅正

三、教授人^ヲノ強化

四、立命館教育ノ特異性ヲ發揮

五、学園ノ自存自治ノ強化

十月十六日

末川博氏私宅ヲ訪問シ、立命館大学長就任ヲ懇望ス。

十月十七日

立命館出ル。

十月十八日

法、経、文、学部教授（若手）吉富外教名ト、学園ニ関シ

テノ意見ヲ聞ク。

十月十九日

法、経、文、学部責任教授十数名ノ学園ニ関スル意見ヲ聞ク。

学生代表トノ会見。

十月二十日

理学部教授ノ意見ヲ聞ク。

十月二十五日
学生代表トノ会見。

十月二十一日

休養。

十月二十六日

夜、岩根宅ニテ末川氏ト会見シ、又辞退サレタルモ再度懇望ス。尚、立命館改革ノ基本方針ヲ提示シ、末川氏満足ス。

十月二十二日

工学部教授ノ意見ヲ聞ク。

十月二十八日

十八日ヨリ二十八日迄十日間、教授学生合せ二百二十名ノ者ト会見シ、学園改革ノ意見ヲ調シタル結果、結論トシテ去ル十月十五日立案セル改革基本方針五項目ト合致ス。茲ニ此レヲ学園ノ基本方針トス。

十月二十三日

中学部教員ノ意見ヲ聞ク。夜、岩根宅ニテ末川氏ト会見。

十月二十九日

一応辞退サレタルモ、再考ヲ煩ス。

十月二十四日

松井学長、我総長室ニ来訪、学長辞意表明サル。夜、岩根

宅テ三度目末川氏ト会見、全氏ヨリ立命館学長就任ノ承諾サ
ル。

十月三十日

大阪本社ヲ出テ、正午阪大ニ本庄学長ト会見シ、末川氏ノ
立命館学長就任ニ対スル援助ヲ乞フ。本庄氏大体承諾サル、
モ、確答ハ明三十一日。

十月三十一日

末川博士阪大ニ出向シ、本庄学長ノ承諾ヲ求メラレ、午後
教授会ニテ承認ニ決ス。

夕方、一切解決旨末川氏ヨリ電話アリ。此ノ難門解決ニ一
安心ス。

十一月一日

立命館学園改革ニ関スル理事会開催。議案ハ先月十五日、
私ノ考ヘタ五項目ヨリナル基本案。

議案上提決議ニ先立ち、小田理事ヨリ、

学園全体ノ改革ヲ必要トスルノ内容ニアルコトハ、理事一
同ハ其ノ責任ヲ免カレズ。以テ総辞職スベキナリト提議サル。
全員之レニ同意シ、総辞職ス。

一方、松井学長初メ責任ノ地位ニアル教授ハ、総辞職ノ申
出アリ。

茲ニ立命館首脳部退職。

学内ノ学生初メ先生方ノ心頭ニ大動揺ガ起リ、大生大会等
モ開ク。

末川新学長ノ事ハ末夕何人ニモ話サズ、私一人ノ心中ニ納
ム。

十一月二、三、四日

大谷政雄教授以下十二名ノ退職、休職、予備、転職ニ対ス
ル申渡ヲ行フ。

此ノ間学生ヨリ改革要求出ルモ、学生ノ意見ハ意見トシテ
聞取リタルモ、学生ノ要求ナリト申シ出ハ、不合理ナレバ之

レヲ受ケズ。

過去一カ月ノ苦心功アリタルコトヲ満足ス。

十一月五日

十一月七日

法経学部教授会ヨリ、学長変更ニ対シ教授会ノ意見ヲ基ニ

末川氏トウ阪大トウ正式辭職。

シテ新学長ヲ決定スベシトノ要求アリ。右ニ対シ、教授会ニハスル権限ヲ附与スルコトハ断然出来ヌト申渡シタルニ、代表不滿ナルモ聞入レズ。

十一月八日
立命館就任手続キヲ取ル。

午后一時ヨリ新理事推選協イブ議員会開催ス。岡善吉以下十三名ノ理事ヲ決定。

十一月九日

石原ヲ理事トサレタルモ、此ノ期会ニ理事ヲ止メルコトニシタ。

竹上理事、新旧学長変更書類ヲ以テ上京。文部大臣ノ認可手続ヲナス。

十一月六日

十一月十日

午后二時、新理事会ヲ開催。

文部大臣学長ヲ認可ス。

岡善吉氏ヲ理事長ニ選任。学園改革基本方針決定。末川博士ヲ新学長ニ就任決定。

十一月十一日

末川学長発表ニ対シ、学内外ヲ通シ好評ヲ以テ迎ヘラレ、

休養。

十一月十三—二十日

法経文、昼夜、理学部、工学部、中学部ニ渡り、新旧学長ヲ学生生徒ニ紹介シ、併テ学園改革方針ヲ発表。

十一月二十一日

立命館大学総長室ニ、京大鳥養総長ノ来訪ヲ受ク。

鳥養総長、京大法学部改革ニ着手シ、学問ノ自由ト時局ニ

鑑ミ七教授ノ退職ヲ断行シタガ、復帰教授トシテ滝川、末川、

恒藤、田村ノ四氏ヲ求メテ居ルガ恒藤氏ハ阪大学長兼帝大教

授ニ、滝川氏ハ帝大教授ニ内定シタガ、残ル末川氏ハ既ニ立

命学長ニ決定、田村氏ハ同志社学長ニ内定シテ居ル。両氏モ

恒藤氏全様、帝大教授ニ承諾ヲ願度。

石原、帝大ノ御事情ハ十分推量出来ル。帝大ト立命ハ兄弟

ノ関係ニアリ、何日迄モ此ノ関係ヲ続ケタイ。従テ本人、帝

大、立命、共ニ都合ノヨイ様ニセネバナラス。就テハ最近末

川氏ガ立命学長ニ就任シタバカリデアリ、且氏ハ一、二度新

聞紙上ニ官学ニハ帰ル意思ナイト発表サレテ居タノニ、間モ

無イ今日帝大教授トナラレテハ、世見^{ミヤミ}ノ人ハ末川氏ヲ変節漢

トシテ取扱フベシ。斯ク評サレテハ大学モ不利デアリ、本人

モ損デアリ、立命モ損ヲスル。結局、三者ノ共同ノ立場ト利

益ヲ考フレバ、帝大講師トスルコトガ最善^{トク}ノ所置^{トコロ}デアル。

鳥養、御説^{ごせつ}最モデアル。教授ヲ取消、当方講師ト言フコト

ニ御願ス。

アル。

午后二時ヨリ理事会ヲ開ク。財団法人立命館寄附行為改正

ヲ提議ス。岡理事長外六名ノ小委員ニ附托。

十一月二十二日

法経学部、昼間部学生ヨリ、此段ノ世界動向ト学生ノ心構

ニ付テノ特別講演^{レクチャー}ヲ初ム。全部科ニ渡り、約一時間半講義ヲ

ナサントス。

十一月二十五日

夜、石原帝大教授來訪。帝大法科若手教授ノ強キ希望テ、末川學長兼帝大教授ニ願度ト依頼ヲ受ケタ。

然シ末川氏ハ講師以上ニ出ルコトハ、本人、帝大、立命共ニ損ナレバ、講師ノ外ナシト申ス。

十一月二十六日

立命館ニ帝大教授佐伯、大隅兩氏參ラレ、前日石原教授ノ話シノ通りデアツタガ、全様断ル。

十二月一日

午后一時ヨリ理事会ヲ開^(マ)。寄附行為改正ニ対スル小委員会ノ草案ニ基キ審議ス。全員一致、改正案ヲ可決ス。

十二月三日

午后二時ヨリ評議員会ヲ開催。

午前十一時頃総長室ニ在リシ時、京都新聞杉山記者ガ來テ、今朝マツカーサ司令部ヨリ戦争犯罪疑^(マ)答者トシテ、梨本宮殿

下外五十八名ノ逮捕命令ガ日本政府ニ発セラレタ。

其ノ中ニ石原ノ名カ加ツテ居ル旨ヲ、知ラセテクレタ。

此ノ知セヲ受ケタ時^(マ)キ、不思議ニモ私ノ胸騒キハ一寸モセズ、來ルモノガ來タト言フ感ジデアツタ。

二、二六事件ノ時ハ、胸ニ一寸動氣ヲ覺ヘタガ、今度ハ全く平常ト變ラナカツタ。

立命館改革ニ着手シテ七十日、重ナルモノハ実行シタ。寄附行為ノ改正モ、五日ノ評議員会テ最後の決定ガ出來ル。僕ノ後ニ岡君ヲ理事長ニシテ面倒ヲ見サスコトニ、一昨日決メタ。コレテ心配ハナイ。立命館ノ改革ガ出來ルト全時ニ呼出シガ來タ。神ハ最後迄石原ヲ助ケル。中川先生ニ対シテ御恩返シカ出來タ。会社ノ事モ心配カナイ。総テ心ニ残ル処ナシ。

正午、篠原京都市長ガ見舞ニ來タ。

午后二時ヨリ協議員会ニ出席。理事会決議セル寄附行為ノ改正案ヲ附議シ、全会一致原案可決。次テ〇〇〇、副會長選任ノ結果、本田義英君ヲ副會長ニ決ス。

午后四時、石原六郎、山村治郎吉氏見舞ヲ受ク。

午後五時ヨリ岡理事長、末川学長、小田理事、竹上理事ト、
小生不在中ノ大学事業上ノ打合ヲナス。

午後六時半帰宅、親族兄弟集リ夜ヲ過ス。

十二月六日

午前九時、岩根宅テ竹田弁ゴ士ト会见。

十二月四日

午前十一時、等持院豫料ニテ末川学長ヲ紹介ト、学生ニ告

午前中田中常憲、北尾半兵衛、億本夫妻、中野其他多数御

別ヲナス。中川先生ノ御墓ニ参ル。

見舞ヲ受ク。正午、新三郎モ来タ。

午后一時、大学本部ニテ全学生、先生等ニ告别ノ詞ヲ述ヘ

午後二時ヨリ町ニ出テ、十町末広町ヲ訪ヒ午後五時帰宅。

ル。

夜ハ長谷川、河尻、続木、岩根、安田、石原六郎、深見氏

夕方帰宅。小山、前川、松川其他ト告别ノ宴ヲ開ク。

等ト晚餐ヲ共ニス。

十二月五日

京都駅ヲ午前八時過キ、^(トキ)氣車ニテ東上。

午前大阪本社ニ出テ、従業員一同ニ告别ヲナス。夕方帰宅。

連日來客見舞客ニ責ラレ、夜ハ一時二時ナラデハ休メズ、

大阪本社テ小山君カラ弁^(ツ)師ヲ選定セネバナラヌトノ注意

疲労シテ居タノテ、車中フラ／＼ト居眠リナカラ時々自分ノ

ヲ受ケタ。自分ハ弁^(ツ)師ノ事ハ考ヘテ居ナカツタ、其ノ必要

書イタ本ヲ調べテ見タ。横浜テ佐藤君カ乗車シテ来テ、目カ

モ感シナカツタカ、小山君ノ進メモアツタノテ初メテ考ヘル

サメタ。

コトニシタ。結局小山、新三郎、高田、岩根ニ一任。

豫定ノ通り八時過着イタ。駅ニ大塚、小宅、河田、健三カ

迎ニ来テ居タ。此ノ人々ト夕食ヲ共ニシ、夜三時迄大塚君ト
弁ゴ上ノ打合ヲナス。

十二月八日

貞永、高田、森田、今井、芦沢、其ノ他見舞ヲ受ク。

十一時、東久邇宮殿下ヲ訪ヌ。告別。帰途篠塚中將ノ靈前
ニ参拜。

午后二時、支店ヲ告別。帰途農銀河上氏ヲ訪フ。

夕食ヲ知人近親ト共ニシテ、夜ヲ徹ス。

十二月九日

愈々本日午前九時半、巢鴨刑務所ニ出頭スル豫定日テアル。

午前九時、三台ノ自動車テ高田、貞永、大塚、健三等ニ送
ラレテ出掛ケタカ、中村公使居ラズ、十一時半迄待ツタカ、

結局又一日入所ヲ延スコトニシテ、富士見町ヘ帰ッタ。

命令八十二日迄二人所セバ良イノデアルガ、家ニ居レバ見
舞。